



SURPRISE FUTURE

- β -

write:chairo

illust:J.

悲しみを繰り返し、僕等はどこに行くのだろう？

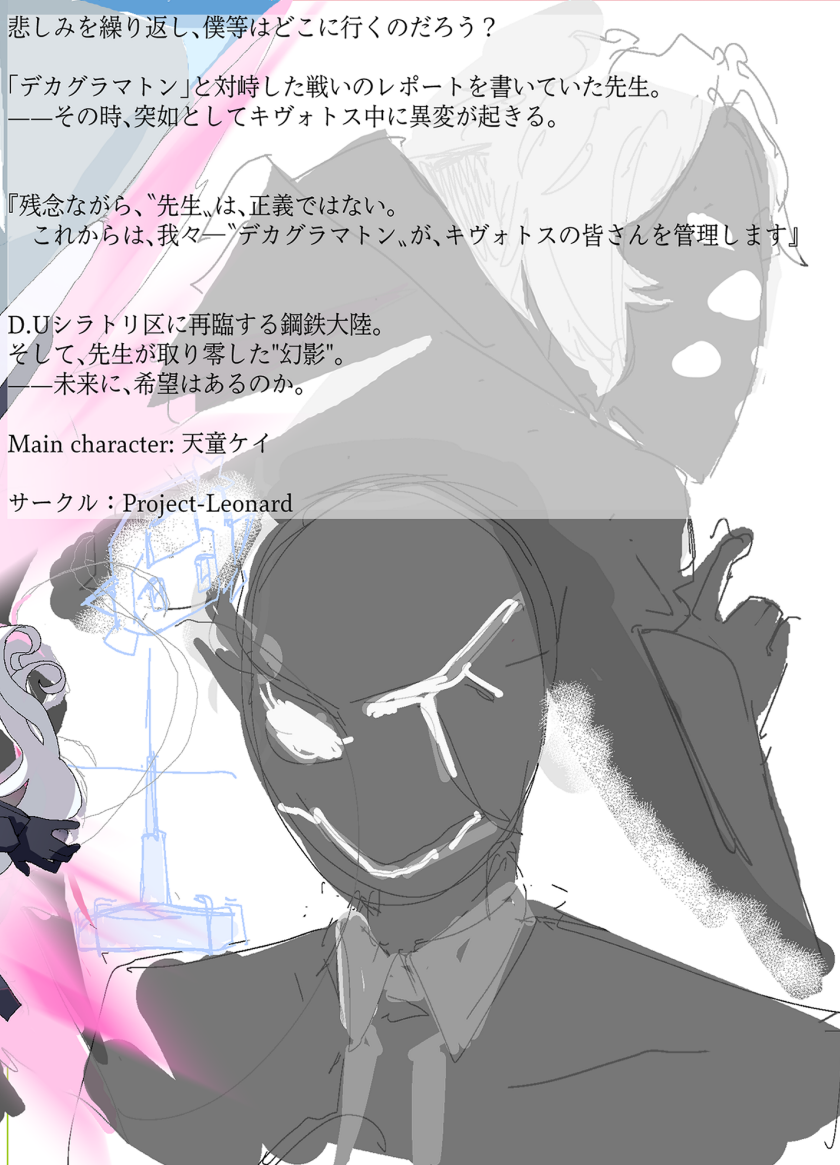
「デカグラマトン」と対峙した戦いのレポートを書いていた先生。
——その時、突如としてキヴォトス中に異変が起きる。

『残念ながら、“先生”は、正義ではない。
これからは、我々——“デカグラマトン”が、キヴォトスの皆さんを管理します』

D.Uシラトリ区に再臨する鋼鉄大陸。
そして、先生が取り零した“幻影”。
——未来に、希望はあるのか。

Main character: 天童ケイ

サークル：Project-Leonard



SURPRISE FUTURE

著 chairō

Illustration:J.

Contents,

I. 『time』 ——P8

II. 『re-ray』 ——P25

Last episode 『W』 .——P51

以上が、「デカグラマトン」と名乗る集団が行った一連の事件の詳細である。

果たしてあれは、正しかったのか。

あの犠牲は、必要な事だったのか。それを識る術は——今の、私には無い。

『これで校了です。お疲れ様です、先生！』

「……ふう」あの、ヘイローが空を覆った日。鋼鉄大陸の事件から数ヶ月が経った。

私はいえ、五日ほど業務を空けた報告として、連邦生徒会に提出するレポートを纏めていたところだった。

……本当に、色々あった。ケイのこと、アイン・ソフ・オウルのこと。

マルクト、そしてデカグラマトンのこと。

……何故、という意識がまた、私の心を過ぎるが、それは別の話だ。

取り敢えず、やるべき事は済んだ。リンちゃん、進捗を確認しに来るまで、あと二十分ぐらいある。……少し休むか……。

私は、目を瞑る。……最近、あんまり眠れてないな。

あの子たちの、ことが……。

振り返るな、とその子はいった。だけど、もし私に。

そんなモノを耐える器などなかったとしたら？

Next Story

次に進む勇氣なんか、消え失せていたとしたら？——これは、そんな物語だった。

これは、延長線上の話。

未来へ進む為の、僅かな猶予の話。

決して交わる事のない、たった僅かの“交流”の話。

しかし、それでも。貴方が望むなら、私は話そう。

これから起こる、懺悔の話を。

I. 『time』

「……お疲れ様です、先生」リンちゃんが、やってきた。予定通りだ。

「お疲れ様。レポートは、ここにあるよ。」

「ありがとうございます。……相変わらず、一人称が多いですね。」

それと三人称も混ざってますし。……私の文章はクセが強いらしく、リンちゃんはいつも苦笑いするんだ。「はは……ごめんね。」

「ですが今回の件に関して、突発的な事態だったとはいえお疲れ様でした。

報告ですが、その後の大陸の処理について——」

「——リンちゃん？」返事がない。

思わず、デスクから目を離す。「どうか、したかな……？」

「つい、て——て、——つ。」

「……リンちゃん!?」思わず、私はシステムの箱を確認する。

「……。」

「プラナ、リンちゃんのバイタルを確認して！」

「……困惑。レム睡眠と同じ状態になっています。」「そんな……!?」

私は身構える。襲撃か。連邦生徒会に支給されているベレッタを構え——

「……貴方、誰ですか？」「……え？」

リンちゃんは、虚な眼のまま、私に問いかけた。

やがて、その眼は……私の持つ、ベレッタに向けられる。

「ち……近づかないでください！」「……!?」

そして、リンちゃんは、連邦生徒会のコートから拳銃を出し――

発砲した。「な……!?」

「な……なんで銃弾が効かないの!?」「リ、リンちゃん、落ち着いて……!!」

アロナ、と私は取るものも取り敢えずシツテムの箱を確認する。「……状況は!?」

『不明です！なんで、こんな事に……!?』

『提案。……今は、一先ずシャーレを出しましょう』『……分かった』

一先ず判った事は……アロナやプラナ、シツテムの箱すら感知不明な状況が起きていると言う事。私は迷わず、シャーレから出た。

『キヴォトスの市民の皆様にお知らせします』

『今まで、貴方たちは—— “先生” と云う存在に、操られていました。』

『残念ながら、“先生”は、正義ではない。

これからは、我々——』

“デカグラマトン”が、キヴォトスの皆さんを管理します。

「なっ……!?!」……どういう事だ。デカグラマトンは消えたはずだ。

なら……マルクト? いや……彼女にそんな気はもうないはずだ。

あるいは……デカグラマトンを騙る何者か……? 「……いたぞ!」

考えている矢先に、怒号が飛ぶ。「……あなたは」

「……久しぶりだな、先生。」そこに居たのは、カイザーのジェネラルと……PMCの大部隊。

「私が認識できてるんだね。……何か用かな」「そうだな……一先ず、言つて置くべきことだが」

くつくつと、カイザーのジェネラルは嗤う。

「……『クライアント』の意向なんだな。死んでもらおう」「なっ……!？」

「撃て!……」一斉に、弾幕が私を襲う。「ぐっ……!」

『先生!力があまり……』『……救援は出した!？」

『出しましたが、応答がありません!このままでは……!』……なら、これを費うしかないか。

私は、大人のカードを出し……そうする間に、レーザー砲の爆撃がカイザーの兵を捉えた。

「何……!？」『……先生!』救援要請に、唯一応えてくれたのは……

「助かったよ、何がどうなってるの!？」

「知りませんよ！モモイも、リオも、どこか気の抜けた顔をして動かないし……!!」

そこに居たのは、ケイだった。

彼女が、鋼鉄大陸で使ったヒマリのライドウェアを使って、空中から砲撃してくれたところだ。「……乗って!!」

「——うん」「逃がすな！」言われるがまま、私はライドウェアに乗り、ケイちゃん共々逃げ仰る。「……また、ケイちゃん呼びですか。もう……」

「……有難う。……これ、どういう状況だと思う？」「解りませんよ！ただ、どうも “下” を観る限り……」……キヴォトスの学生達が、不自然に突っ立って『デカグラマトン』が流している映像を見ている。……どこか、虚ろな表情で。

「これは……」「……恐らく、キヴォトス中がこうなんだと思います。正気なのは私達と……」

「カイザーのジェネラル……何故だろう。」恐らく、口ぶりからすると。

『クライアント』が、今回の黒幕だ。それも……かなり、資金のあるタイプの。

「……まさかな」嫌な予感がするが、今はそれを心にしまった。

「何か、心当たりが……っ!?」ケイちゃんが、驚く。……私達の体が、ぐんと下がっていくのを感じる。

ライドウェアの故障だろうか。いや、これは……兎に角。

私達は確実に、墮つこちていた。「……っ!?」

アロナ、と私は叫ぶ。「……ライドウェアのコントロール奪還を試みます!」

ライドウェアは暫く持ち直すが、……変わらず、拮抗しているようだ。「ハックに使われているのは……デカグラマトンの信号に、これは……!?」

「警告。以前、……アクセスした事のある、経路です。」……プラナも助力するが、ハッ

キングの綱引きは……私達の敗けだった。

何故なら、プラナが言い終わる前にカイザーの対空掃射を受け、私達は墜落したからだ。

「……がつ!!」

「——先生!」ケイちゃんが、着地の瞬間私を抱き止めた。……流石は、新しいキヴオトスの生徒だ。「……ありがとう。」

「氣を付けてくださいよ。この身体、死ぬほどの無茶はできませんから。」そう言って、ケイちゃんは私を下ろす。「……一旦隠れよう。」

そう言つて、私達は路地裏へと身を潜める。

「……は、はあつ……。」久しぶりの運動だ。身体が鈍い……。

ふと、そんな折。私は、「それ」を見た。

「……先生？どうしましたか？」「……そんな。」建物の日陰をすり抜ける、「彼女」の片鱗を。

いや、そんなはずはない。そう思おうとした。

だって、「彼女」は――。

「……先生？どこに行くんですか!？」

「……」気づけば、躰の方が先に、動いていた。

だって、そんな、彼女は、いや、「彼女達」は、もう。

——馬鹿な。

「来たね。」「予定、通りですね。」「……ミッション、開始、です」

そんな。

『あーあ、先生。あなたが——

振り返っちゃったから、こうなっただんだよ？』

その瞬間、私は心の底から後悔した。

『彼女達の幻影』を、追った事を。

そこにいたのは、消えたはずの。

アイン、ソフ、オウルだった。「……!!」

「先生！一体、何、が」……。

ケイも、この光景を視て、絶句していた。

この光景を、拒絶するような瞳を用いながら。「——なんで」

『やあ、先生。それに——ケイ。』

『お久しぶりですね、先生。』『お変わり、なさそうですね』

「——、あ、……。」

私は、頭が真っ白になっていた。「……なんで、貴方達がここにいるんですか」

先に意識を取り戻したのは、ケイだった。「私達、……ずっと、貴方達の事——」

『過去の話でしょ。もういいじゃん。』

「……な」

それは、空白と虚無を形にしたような、対峙と訣別だった。『……先生に、お願いがあつて来たんだ。』

「……、……。」何かな、とすら言えなかった。

彼女達が、息をして喋っている事がまだ信じられなかったからだ。

お構いなしに、ソフは続ける。

「——それでね、先生には……」そう、言い終えるより前に。

私は、地面に項垂れていた。「……先生!？」

ケイが、慌てふためくが。そんな事すらも私にはどうでも良かった。「……ごめん」

私は、君達に謝らないといけない事がある。

「ごめん、ごめんなさい……!!」

私が、私のせいで、私が責務を果たさなかったせいで、生かして、あげられなく

て……!!」

「……先生、しっかりしてください……!!」ケイが、何とか私を抑えようとする。

だけど、無意味だった。「『生きるべきだ』、つて云ったせいで、言ったのに、その道すら与えられなくて……こんなに、私が、弱くて……!!」

『どうでもいいよ、そんなの。』

「は……？」 ケイが、啞然とする。

『だって……いいよね。貴方達だけ総て持っていて、ハッピーエンドを掴んだんだから』

「……、……。」

『愉しかったですか？私達を踏み躪って、のうのうと、その生を享受した有様は。』

「……何を、言ってるんですか」

『結局……貴方達は希望を呟くだけ呟いて、私達に何もしなかったただけじゃ、ないんですか……？』

私は、もう、壊れそうになっていた。「あ、……。」

『なのに、貴方達は振り返ろうとした。私達の『幻影』に、追い縋ろうとした。それが、この罰だよ。先生？』

そう言つて、背後にいる何者かが貌を出す。

「……お前、は……」

最悪の事態だ。

私に先刻の絶望感すら遠くに追いやるほどの、怒りが過ぎる。

「……これはこれは。元気にしましたかな？」

そこに居たのは、地下生活者。かつて私が、「相手にする暇などない」と拒絶した者。

「そ。今の私たちの『マスター』。」「ソフが喋るが、……私はもう気にも留めなかった。

「……この子達に……何をしたんだ」

「……そう畏れなざるな。…暫しこの間に、降ってきた『欠陥体』^{Defect}と屑鉄を手に入れましたね、『再利用』したまでです」

「……お前……!!」私は腑が煮え繰り返りそうになる。

「神のなり損ないから屑鉄を「繋ぎ合わせる」のには苦勞いたしましたね。……それがこの結果ですとも。」

今のこの鉄共は、ただの『屑人形』ですとも。

KPに従順に動く、ただの「屍骸」^{スワンプマン}とでも言いましょうかな。

そう、高らかに宣言する。

私は吠える。……吠えるしか、なかったんだ。

「……どこまで、この子達を侮辱すれば気が済むんだ……!!」

「そりゃ、そうでしょう。役目を終えた「投棄物」^{ジャンク}を、使つてるだけですから。……おや。捨てていったのは貴方達ではないですかな？」

「……………」
「……………」もういい。もう、私は役割を放棄した。

大人のカードを出す。「……先生……!？」

「……また『チート』ですか。大人気ない事を」「……座標を尖兵に転送」

ソフが何かした。すると……

「……!!」「先生っ！この状況じゃ、『それ』も役に立たないですよ……!」

……私達は、通路をデカグラマトンの尖兵達に塞がれてしまっていた。

「カード単体なら、このように詰ませることができずとも」

「……まだだ。せめて、差し違えてでもお前を」

私はカードを遣おうとする。……こいつさえ、斃せれば。

後は、生徒達に任せればいい。「……しつかりしてください!」

「——ッ。」

ケイの吠える声に気を取られ、……私は、ケイにカードを取られてしまっていた。

「いい加減にしてください！先生が、死んだら……遣される者の事も、考えてくださ
い」

「……ケイ」

『あー、もういいかな。つて』

ソフの指示を受け、デカグラマトンの尖兵が発砲する。

……それを、ケイがルミナス・ノヴァで防いだ。

「ぐっ……！」 「ケイちゃん！」

なんで、こんな事を。そうソフ達に言おうとした。

だけど、却ってきたのは無情な答えでしかなかった。

……先生。何度私達に問いかけても、無駄だよ。私達は管理者に従う。

ゲマトリア

『だから先生。私達の事を可哀想だと思うなら——』

この結果を後悔してるなら。贖罪にここで、死んで？』

「……………」。「先生、今は…………!!」

分かつてる、とすら今の私には言えなかった。

「……先生。私が路を作ります、だから先生はその隙に——逃げてください。」

「ケイちゃん…………!! やめて!!」

「お別れです。先生——愉しかったですよ、今迄のこと。それともしアリスに会えたら

——」

デカグラマトンの兵隊が、発砲する。

私は、網のように張り巡らされた弾幕に、それに立ち向かうケイに。

ただ、見ていることしかできなかった。

II. 『re-ray』

「……？」

私は眼を開ける。どうやら私達はまだ、生きているらしい。

「えっ？……先生、無事ですか？」「……ここは」

「クク。どうです？キヴオトスを救った先生からお尋ね者へと堕ちる気分は」

そこにいたのは、黒服だった。そして、ここは……

旧ゲマトリアのアジトだ。私も一度通ったことがある。「……お前」

「久しぶりですね。いや、〃初めまして〃、ですかね。其方の方は」

クク、と奴は笑いを含めている。「……何故、私達を助けた？」

「……それこそ、*“クライアント”*の意向でしてね。」そう言つて……奥から、衣擦れの音が聞こえる。「……君は」

「……、先生。」そこに居たのは、マルクトだった。

「デカグラマトンのオーパーツの情報——統べる存在の*“一端”*を提供いただく代わりに、貴方達を助けろと。そういう契約ですよ。お解りですか？」

「すまない。先生。だが我は——」

「お前……!!」先生は黒服に掴み掛かろうとする。

……何か災厄を引き起こすなら赦すつもりはない、という眼で見るが……

奴は余裕だ。「お忘れですか？我々「神秘を観察する者」は解散しました。私がそれに応じたとしても、メリットがない」

「……何が目的だ」「……よろしい、お話ししましょう」

そう言つて、奴は続ける。

「報復ですよ。かつての友の軀の。」

……無礼を働いた奴への、と黒服はどこか考えるような仕草をする。

「地下生活者……と言いましようか。奴は以前私が理外に追放しましてね。これは私の不手際でもあります。……あなた達に協力する代わりに、奴の身柄を私に寄越してくれませんか？それが条件ですよ」

目には眼を、齒には齒を。……これは、何方がその『遺物』を争奪できるか、という競争です。

異論ありませんね？と、黒服は続ける。「……。」

「……あの子達は」「……っ……」

「ああ、奴が使っている『あれ』のことですか」……こいつ。

「……………言葉を改めてくれ。でないと私はお前に——」

私はマルクトを想い、庇う。——だが。

「……………我は大丈夫だ。あの子達は……」

「拾ってきたのでしよう。元“鋼鉄大陸”から回収したオーパーツを元に、欠陥体を繋ぎ合わせてコアと記憶を復元させた。」

「その上で……何らかの洗脳状態に置いたのでしょうか。あるいは——」

……或いは、と少し言い淀むような空気が流れた。

それを告げたら、後戻り出来ないとも云うように。

「これは推測ですが…色彩を導き、そのリソースで“コア”を意図的に塗り潰した可能性もあります」

「……………!!」

マルクトの貌に現れたのは、焦燥だった。……それもそうだ。

ただでさえ愛し、愛された姉妹しまいが危機に遭っているんだ、動じない訳がない。

「……解った。先生。………済まないが、我は行かせてもらう」

まずい、情報が取れていないここでマルクトが単独行動を取るのは。

「……待つて……!!」私は静止しようとした。だが……

「解らないかも、しれないが……私達は……あの子達は私自身なんだ、済まない。……」

「……マルクト」何処かに感応する所があったのだろう、……話を訊いていたケイは複雑な表情をして立っていた。

マルクトは立ち去ってしまった。「……此方は此方に出来る事をしましょう」

そう、黒服は謂う。「……何か、策があるのですか？」と、ケイが尋ねる。

「ありますよ。丁度“彼女”の協力だね。」と、黒服はモニターの方向を向く。

『お久しぶりですね、先生。』『…君は』

『今回の案件、洗脳されたのは“ヘイローを持つ者”のみですからね。私は例外です。』
旧ゲマトリアのモニターに映し出されたのは、ヒマリのドット絵だった。

シャーレのデータベースに情報がありました、と説明するヒマリの人工知能。

『先生、貴方も知っている通り、相手は洗脳を使う能力を持っています。…それを、
“あの子たち”を触媒にして増幅させている、とするのが妥当です』

もう少しで届くはずなんですがね、とAIは言った。

『ミレニアムの格納庫のロックを解除しておきました。……しかし』

この装備でも、デカグラマトンの預言者達を突破することはできないでしょう。そうAIは告げる。……彼女の視線が、『もう一つの装備』に移される。

「それと……もう一つ。『あの時の装備』を、回収しておきました。

これを改修しましょう。できますか？アンノウンさん。」

「納期によります。ただ、最悪の事態を考慮して……早い方がいいでしょう。」

所詮、奴の掌にはデカグラマトンの総てのシステムが手中に収められていると言っているではないから、と黒服は話す。

「……。」今の私には、発言する事すら決めかねるほどの葛藤プレッシャーがあった。

「……此方の出撃は48時間後。……それまでに、整理をつけておいてください。」

……ここで問答をぶつけても、キリがない。

「……私はまだ「はい」とも言っていないんだけど」

クク、と嗤いながら、「……迷いますか、」と奴は言っていた。



同時刻。マルクトは、そこに辿り着いていた。

『来たね、お姉様。』

「……アイン、ソフ、オウル……!!」

D. U. シラトリ区内、強引に建設された『鋼鉄大陸』を模したオブジェクトの上に彼女達は立っていた。「……来ましたね。ようこそ、王妃よ」

地下生活者がそこに現れる。「……貴方か、この騒ぎの基は」「さて、どうでしょう」

この子達を復元させたことには感謝してます、とマルクトは言った。

「だから、アイン、ソフ、オウル——妹達を、返してください。」